『ミドゥルタウン』は都市社会学の著作か

—バージェスの二つの書評の比較分析—

韓　　榮惠

1．はじめに

本稿は第二回筑波社会学会大会のシンポジウムで行われた報告に基づいて新たに書かれたものである。基本的な論点はその報告のなかで提起されたものであるが、その後若干の資料を調べシンポジウムで提起した疑問点にたいする手がかりを得たので、それを本稿で示したいと思う。

やむをえない事情でシンポジウムの五日前に報告を引き受けることになった私は、それまで「ミドゥルタウン」を読んだことがなく、そのうえ都市社会学の理論的流れや方法論的立場についての基本的理解ができていなかったため、正直にいってたいへん困ってしまった。そこで私は「非適任者」という自分の立場を積極的に前面に出すことにした。このシンポジウムの企画から報告者の選定に至るまで、これは「都市社会学」の領域であるという認識が当り前のように存在していたが（むしろ皆が当り前のように思っていたためかも）、タイトルは「ミドゥルタウンの今日的意義」であって、「都市社会学における」という限定はついていなかった。それを幸いにして、自分は頭から「都市社会学」という観念を消したうえで本を読み、論点を見出してみようと思ったのである。

こうしてなんとか三、四の論点を整理して報告に臨むことができた。論点をまとめるに当って、それまでとは 180度変ったことがある。それは、意識的に頭から消してしまおうとした「都市社会学」という観念、あるいは枠を今度は一生懸命に思い浮かべようとしたことである。なぜかといえば、本を読み終わったとき、この本が都市社会学の古典として位置づけられるゆえんが私にはよく理解できなかったからである。シンポジウムで提起した諸論点は基本的にこの疑問から出発したものである。本稿では、まず私がそのような疑問を抱くよ

うになった具体的な理由を示した後、その問題に関する自分の仮定を論証してみたいと思う。

2．問題提起：「ミドゥルタウン」はなぜ「都市社会学」の本なのか。

私は「ミドゥルタウン」は都市社会学の本ではないのだと主張するつもりは全くない。ただ、本書を読み終った際の自分の素朴な感想、すなわち、“なぜこれが都市社会学の本？”という疑問を突詰めてみたいだけなのである。実は私だけがそう感じたのではないようである。シンポジウムの直前に行われた院生読書会でも、具体的に誰がどのようにというのは覚えていないが、同様の感想が出たと記憶している。なお、シンポジウムでは、町村先生が報告の第一の論点として「『ミドゥルタウン』は都市社会学の古典か？」という問題を提起した。

私にそのような感想を抱かせた基本的な要因は、「ミドゥルタウン」が常識的な「都市社会学」観念では包摂しきれないほど多様な内容を含んでいるということであろう。しかし、内容を以て「都市社会学」に分類できるか否かを論ずるのは非常に難しい。なによりもまず、シンポジウムで町村先生の報告にもあったように、「都市社会学」そのものの観念が一定してはいないからである。私が「『ミドゥルタウン』はなぜ都市社会学に分類されるようになったか」という問題を提出するには、内容的な側面ばかりでなく、あるいはそれよりも、形式的側面に関わるいくつかの具体的な理由がある。

第一に、本書を通じて観る限り、リンド自身が自覚的にこれを「都市社会学」的研究として位置づけたとは思われないということが、疑問の出発点だった。この点は周知のことで、中村先生も訳者解説でその辺の事情について述べている。たとえば、リンドが1920年代初期に勤務していた社会・宗教研究所で、典型的なアメリカ小都市での宗教にかんする布教や慣行の実態を調査する研究計画を設定し、リンドがそれを担当することになったが、これが本書の出発点であること、すなわち、「middletown」の出発点は宗教であったことが明らかにされているのである。方法論に関しても、リンドは人類学的方法を明確に打出

しているのに対して、当時アメリカでシカゴ学派を中心にして非常に盛んだった都市社会学のことは一言も触れていない。

第二に、他の人の評価として、たとえば「middletown」の序文を書いたC.ウィッスラは、本書は「社会人類学的方法によって標本的なアメリカの一地域社会を扱う先駆的試み」であるが、「本書が貢献しているのは、この点、つまり方法の実験であるだけでなく、現代生活の社会人類学という新分野の実験という点である」とし、さらに「昨日という背景から照し出された今日の地域社会における諸活動の横断面」という意味での「歴史に対しても貢献する書物」と述べている［ミドゥルタウン：4、5］。都市社会学が盛んな時期だったにもかかわらず、少なくとも「middletown」が出版された時点においては、序文を書いた人でさえ都市社会学と本書との接点について何も言っていないのである。

第三に、中村先生の解説によれば、「middletown」が高い評価を受けることによってリンドはその刊行の翌年に社会科学研究協議会の事務局長として迎えられ、次の年の1931年にはギディングスの後継者としてコロンビア大学に招かれるまでになったそうである。そのときコロンビア大学では、おそらくシカゴを意識した面もあって、理論よりは調査に優れた研究者を招くことにしたとのことだが、私は中村先生の解説からリンドの調査方法と「middletown」そのものが高く評価されたということはわかったけれども、当時における「middletown」と都市社会学との接点は依然とわからずじまいだった。すなわち、少なくともウォーナの「Yankee City」が出るまでのアメリカ社会学界におけるリンドおよび「middletown」にたいする評価、とくに都市社会学にたいして新しい観点を提示するものとしての評価については何の手がかりも得ることができなかった。リンドがコロンビア大学に招かれたのはパークのいるシカゴ大学の都市社会学に対抗できる、あるいはシカゴ流とは違う学風を形成できる都市社会学者としてだったのかどうかは全く不明である。もしそれを示す資料があったならば、中村先生が解説でそれを提示しなかったはずがないだろう。

もちろんある書物が出版よりしばらくして違った角度から再照明されることはしばしばある。しかし、都市社会学の「古典」とまで言われる本書について、その刊行からしばらくの間アメリカ社会学、とくに都市社会学における位置づけや理論的、方法論的意義が明確な形で示されていないのが、私としてはどう

しても納得がいかなかった。

3．「ミドゥルタウン」と都市社会学の接点を求めて：
バージェスの書評分析より

私がこの原稿を書くために行った作業は、「ミドゥルタウン」刊行当時、すなわち1929年から1930年代にかけての時期における本書と都市社会学の接点について調べることだった。限られた時間内に自分でできることは雑誌を調べるくらいのことで、都市社会学の学説史または学史を勉強することは無理だった。とりあえず1929年（「middletown」出版）～1933年（リンドがコロンビア大学に招かれた 2年後）と、「transition」が出た1937年およびその前後１年のA.J.S.を調べることにした。調べる時間の幅は、まず書評が載っている可能性を中心にして決めた。また、リンドが大学にポストを得て、いわゆるアカデミック世界の仲間入りをした時期も考慮に入れた。調べた事項は主に、直接関係のある論文があるか（論文の内容を全部よむことはできないのでいちおう題目から推察した）、書評が載っているか、ニュースやノートにリンド夫妻および「middletown」、「transition」について何らかの記述が見出されるか、などの 3点だった。

その作業をとおしてバージェスの「middletown」と「transition」の両方にたいする書評を見つけることができた。この書評は都市社会学界では周知の物だろうが、中村先生の「ミドゥルタウン」の訳者解説およびシンポジウムでのコメントと町村先生の報告のなかで言及されることがなかったので、私は自分で調べるまではこの書評の存在を知らなかった。他にはニュース欄で「middletown」とリンドのそれぞれに関する小さな記事を見つけただけである。しかし、見落したものがあるのかもしれない。「middletown」に関する記事はこの本がまもなくフランス語で出版される予定であることを伝えるもので［A.J.S.Vol.37,No.1,p.1, 1931］、リンドに関するも記事は1931年 4月に東部社会学会定例会の第三部会（社会調査の部）でリンドが司会を勤めたという内容のものである［同、Vol.37,No.2,p.277,1931］。この時期はリンドがコロンビアに行く

前であるが、学会メンバーとして活動はしていたようである。

「middletown」書評がA.J.S.に初めて登場するのは、本が刊行されてから 2年も過ぎた1931年11月である。本の刊行と書評が書かれた時期とのこの間隔は、後の「transition」についての書評（同じくバージェスによる）が本の出版と同じ年に掲載された（1937年11月号）のに比べると甚だ遅い。「middletown」は、中村先生もいうように、刊行した年のうちに増刷に次ぐ増刷となり、その業績が認められてこそ社会科学研究協議会やコロンビア大学に招かれるようになったほど大きな反響を呼んだ著書であるということを考えると、書評が書かれた時期は遅すぎるような気がする。この問題については後にまた触れるので、ここではこれ以上言及しないことにしよう。

まずは二つの書評の内容を紹介しておきたい。

バージェスは「middletown」の書評のなかで、方法論や内容について批判的な評価はほとんど行っていない。なお、本書を当時の都市社会学の流れと関連づけて論じることもない。バージェスは本書をアメリカ文化についての古典的研究として位置づけており、方法論的意義として次の三点を挙げている：(1)社会人類学の方法を近代的都市に適用していること、(2)事例研究と統計的方法の両方をうまく取入れていること、(3)これは地域研究の方法にたいする優れた貢献であるが、1890～1924年間の地域の発展を追跡するより1890年と1924年という二つの時点に集中することによって、一地域の社会史に留まらずにアメリカ文化の推移の研究という性格を獲得しえたこと。内容的には、本書が現代アメリカ文化を描いている点、とくに技術の進歩と文化変動とのギャップをそれまでのどの本よりもよく示している点を高く評価している。そして最後に、一つの提案をするなら、今後の研究においてはパーソナリティの発展と地域生活との関係を探求すべきであると述べている。

「transition」の書評は「middletown」書評に比べてまず 2倍の長さがあって、批評そのものも前より丁寧かつ詳細で、厳しいものがある。「middletown」の書評は全般的に高い評価をしてはいるものの、なぜか気がぬけた感じがした。が、今回の書評は具体的な批判をいくつも述べているにもかかわらず、本当はより高い評価を与えているように思われた。しかも前の書評よりはるかに面白い。なぜだろうか。おそらくこの書評はバージェスが自身を前面に出している

からであろう。まず印象的だったのは、この書評のなかに「middletown」にたいする、とくにその方法論にたいする批判がかなり出てくるということである。当の「middletown」の書評では全然触れなかった方法論的問題点やリンドの価値観の問題をここで指摘している。リンドの価値観についてもかなりの議論を展開している。まるで二つの著書を併せて批評しているような感じ、極端にいえば「middletown」をもここで批評し直しているような感じすらあった。

バージェスは、「二つのミドゥルタウン研究、とくに今回の研究、が都市地域にたいする他の調査研究と著しく違う特徴は、都市を生きている存在、集合的行為の総体（entity）として描いていることである。」［A.J.S.vol.43,no.3,p.487］ と、この書評ではじめて都市研究における「ミドゥルタウン」の意義について述べている。「urban community」という用語すら前回の書評では出てこなかったのである。ともかくこのように「ミドゥルタウン」の全般的な意義づけを行ってからバージェスが論じている内容は、「transition」の方法の批判的考察と代案の提示、「middletown」と「transition」の間の変化の指摘、そしてリンドの価値観と調査研究にたいするその影響の評価、という三つの内容に要約できる。「transition」の方法論の問題にかんしては、次のような四つの点が挙げられている：(1)不十分な数の個人面接と新聞記事および論説に過度の信頼が置かれている。質問紙あるいは他のサンプリング方法を用いた方が、おそらく不可能だっただろうが望ましかったのではないか。(2)入収可能な公式的・非公式的記録からの統計的資料は巧みに処理されているが、もし生活史方法が採られたならば、確実に、その地域の文化を理解するうえで重要なデータが得られたであろう。(3)業務階層、労働階層、黒人の家の配置を示す略図を除けば、ヒューマン・エコロジーの方法がまったく採用されていない。しかし、エコロジーの方法を採っていたら、地域生活の文化的上部構造の分析にたいして確かな客観的基盤を提供しえただろう。(4)ミドゥルタウンは独自の一つの標本（specimen）ではなくてアメリカ文化や生活の横断面なのだから、経済的、社会的総体としてのミドゥルタウンは、それと他の総体、すなわち、その後背地、それが依存している大都市地域、それが位置している地域（region）、そしてアメリカ、との機能的相互関係の側面が研究されなければならない。

「middletown」と「transition」の間の変化については、バージェスはその変化を一種の進歩として受取っているようだが、三点が述べられている：(1) 前者における二つの階級によるグルーピングはあまりにも単純化されたものだったが、後者ではそれがより適切な六つのグルーピングによって補完された。(2) 前者は人類学的研究と明言されたが、後者はほとんど完全に社会学の分野に移動している。しかし、未だに残っている人類学的性格があって、それはミドゥルタウンとその住民たちを孤立的な原始部族と同じように総体的に（ in total situation）研究できるという仮定である。(3)両方とも基本的には分析的というよりは記述的な書物である。しかし、後者においては有意義で示唆的な、記述から分析への推移がみいだせる。その傾向はとくに新たに書加えた章、すなわち、その地域における支配的一家の役割に関する章やミドゥルタウン信条（Middletown credo）の統制的影響に関する章に現れている。このような諸変化がみられるが、解釈は両方とも主に技術の変化に追い付けない諸制度の文化的遅滞および支配的業務階級と従属的労働階級との文化的葛藤という観点からなされている。

最後にリンドの価値観に関してであるが、バージェスはリンドが「transition」の序文で重要な方法論的問題を提起していることに触れつつ、この問題を論じている。バージェスはリンドの立場を端的に「自由主義的な集合主義的観点（liberal collectivistic point of view）」と表現する。バージェスによれば、リンドはミドゥルタウンの研究に、ニュウーヨーカーという大都市人の文化的観点、社会科学的背景や装備、そしてモダーン・リベラルの偏見を持込んでしまった。モダーン・リベラルの偏見とは、すなわち、「自由放任主義的個人主義（laissez faire individualism）」に対する不信感、政府の干渉と計画への信念、台頭するファシズムに対する恐怖、などである。バージェスは、リンドらの合理的な社会的行為、集合主義、政府の集中的統制などへの偏りが明らかに解釈に影響を及ぼし、支配的（prevailing）文化の肯定的機能の評価に限界をもたらしたのだという。さらに、リンドらが批判する民主的政治過程における便宜主義的政策こそが、その明白な非論理性にもかかわらず、地域連帯という価値を保存せしめることによって、文化的葛藤を最小限にし、かつ集合的行為を可能にするのだと。そして最後にバージェスは次のような文章

で書評を締めくくっている：「しかし、リンドらは彼ら自身の諸発見が明快に示す結論に到達している。すなわち、ミドゥルタウンーそこにアメリカを加えてもよかろうーは右か左に大きく逸脱することなくその間をずっと『なんとか切り抜けて行く（muddle through）』だろうという。」

全般的には後の書評が真摯に、こころを込めて批評しているような印象をうけた。まずリンドの著作に対するバージェスの態度が変ってきたような気がする。以下では私の問題意識からして興味深かった点を、やや荒っぽいけれども自分なりの分析を交えながら整理してみることにしたい。

何よりもまず、両書評における「middletown」にたいする評価の鮮やかな違い、およびバージェスの批評態度の変化が興味ぶかかった。「middletown」に対するどのような批判が当の「middletown」の書評には出てこなくて「transition」の書評にはじめて現れるのかは、上に要約した内容からも明らかであろう。その批判は、一言でいうなら、社会学的研究としては方法論が粗末で厳密さに欠けているということである。例えば前の書評で高い評価を得た近代的都市地域にたいする人類学的方法の適用は、後になって厳しい批判の対象に一転してしまった。しかし、ここでは批判ばかりではなく、かなり具体的な代案の提示や提言も試みられている。前はこのような試みは見られなかった。また、「middletown」書評ではその著作をいわゆる「社会学的」観点から論じることはなかった。当然、「都市社会学」の流れのなかでこの著作をどう評価するかというのは論外である。ところが後の書評は、両著作を含めたリンドのミドゥルタウン研究を従来の都市研究に比べつつ論ずることから始まっており、かつ「社会学的」研究としての方法の問題を論じている。これは、少なくともバージェスが「middletown」の段階ではまだそれを社会学的研究として認めなかったが、「transition」になってはじめて社会学として認めたことを物語る事実ではないだろうか。あるいは、この時期になってリンドはようやく「社会学研究者」の仲間として認められるようになった（研究成果という点からは）のではないだろうか。あのコロンビア大学に招かれたのは「middletown」という業績のお陰だから、その時点で認められたといえばいえないこともない。しかし、バージェスの書評から推察できるのは、少なくともバージェス自身、そして彼に似たような社会学観あるいは感覚をもっている研究者たちは、「middletown」

の時点ではリンドを社会学研究者の一員として受け入れる心の準備がまだできていなかったのではないかということである。だからこそ「middletown」は、その輝かしい登場にもかかわらず、刊行後 2年も過ぎてやっと社会学の専門研究誌に書評を書いてもらうことになったのではなかろうか。

ただ、この推論にある程度の説得力をもたせるためには、ここで別の疑問に答えなければならない。すなわち、認めていないのなら、どうして 2年も過ぎた時点で突然書評を書き、しかもそれをA.J.S.に載せなければならなかったのか、という疑問である。それまでこの本を読んでいないか、もしくは読んだけれども社会学的意義は認めていなかったバージェスが、何等かの理由でその意義を新たに認識するようになっただろうか。バージェスの「middletown」にたいする評価からみてこれはまずありえない。第一、バージェスは「middletown」を「社会学的」著作としてみていないからである。あるいは、「middletown」書評を書いたときはバージェス自身の方法論的意識がまだはっきりしていなかったただろうか。もちろんこれもありえない。当時シカゴ大学の教授だったバージェスは、かなり前から主要な理論的、方法論的立場を形成しているのである。とすれば、次に私に考えられるのは、研究そのものには関係のない外部的要因である。書評が載ったA.J.S.1937年11月号は、同時にコロンビア大学のギディングス教授の死を報じるとともに同教授を忍ぶ記念論文をも載せている。リンドがギディングスの後任としてコロンビアに行ったのは中村先生が述べたとおりである。その人選が決ったのはいつ頃か、それが公表され、なお実際赴任したのはいつか、などについてはわからないが、憶測をおそれずにいえば、この時期には（正確には雑誌に載る前、バージェスが書評を書くことが決った時点では）ことがかなり進んでいたのではなかろうか。とすれば、「middle-town」の書評はリンドのコロンビア赴任と密接な関係があるかもしれない。極端にいえば、アメリカ社会学会あるいはシカゴ大学社会学科のコロンビアにたいするあいさつだったのかもしれない。あるいは、すでにアメリカ社会学の権威として、とくに都市研究における独自の立場を確立していたバージェスの、都市地域研究をもって社会学界に仲間入りした後輩にたいする好意の印しだったのかもしれない。とにかく、両者の間に関係があるとは思うものの、この仮定を根拠づける資料を探す精神的、時間的余裕が今の私にはない。

結論的に、シンポジウムで提起した問題に関連して次のことがいえないだろうか。つまり、「middletown」ははじめからアメリカの社会学界で「社会学的」研究として認められたのではないと。それが評判になったのは、むしろ社会学以外のところであったのだと。しかし、私はこれをもって「middletown」の社会学的意義を認めまいとするのではない。 逆に私は、この本がある固定した「社会学」観をもつ社会学研究者、しかも都市社会学の権威であるシカゴ大学のバージェスによって書評を書かれるようになったということが、この本の含蓄している豊かな可能性を社会学そのものにたいして閉ざしてしまったのではないかとまで思っている。バージェスの書評をみればわかるように、彼の批評は方法論、しかも地域ないし都市研究に関連する方法論の側面に著しく偏っている。それはバージェスとしては当然なことで、むしろそれが正しい方法だったのかもしれない。もし研究の出発が宗教だったということで宗教社会学の研究者が書評を書くことになったならば、あるいはアメリカ文化に関する本だとして文化社会学者が書くことになったならば、いまごろ「ミドゥルタウン」の評価や位置づけはどうなっていることやら。日本語訳はまた誰が引き受けることになっただろう。

以上では「middletown」の評価を中心に考察したが、今度は「transition」を中心に考えてみよう。バージェスは「transition」を「middletown」より社会学的価値があるものとして高く評価しているように思われる。いいかえれば、方法の面においても分析の面においても、「transition」は社会学的により洗練されたものとみているのである。確かに、バージェスの一つ一つの見解は正しい。そこで私はとんでもない(？)問題を提起してみたい。「middletown」と「transiton」はほんとうに「ミドゥルタウン」として一つに括れるような連作としか見れないだろうか。同じミドゥルタウンを十年の時間をおいて連続して調査しており、しかも主な調査項目は変らないのだから、「ミドゥルタウン研究」として括っても文句はいえないかもしれない。前の研究より後の研究が洗練されたとみるのは、つまりある種の発展を遂げたとみるのは、両者を連続的な研究として捉える発想に基づく見方だが、私はそれらを別々の研究と捉えることも可能ではないかと思う。「middletown」は周知のとおりそもそも宗教にたいする関心から出発した。その関心を追求し有意義な結果を得るための

研究方法を模索するなかで浮び上がったのが、ほかならぬ人類学的方法であった。リンドは、典型的なアメリカ社会の宗教生活を理解するためには、ある典型的な地域を選び、その地域社会全体の文脈のなかで宗教生活を理解するという方法を採ったのである。実際研究を進めていくなかで最初の関心がそのまま維持されるとは限らない。しかし、確かにいえることは、「transition」の出発点はもはや宗教にたいする関心ではなかったということである。「transition」の序文にあるリンドの記述を引いてみよう。

> 私は他の研究－不況が小さな比較的に同質的な家族集団（group of families）に及ぼす影響に関する研究に没頭していた。1925年のミドゥルタウン研究を、好況と不況の劇的な十年間に生じた全般的な変化－好況と不況はその地域にも影響を及ぼしていた－を分析する基礎として使うことができると思い、再調査を引き受けることにした。当初は「middletown」の新しい版に後期としてせいぜい一つか二つの章をつけくわえる予定だった。ところが、夏の間の刺激的な一仕事になるはずだったのが 1年以上に渡る集中的な研究となってしまった。この事実こそ、1935年にミドゥルタウンが直面していた問題の重要性を証明するものである。transition,p.ix)

これは、ミドゥルタウンの再調査に消極的だったリンドがなぜ再調査に踏切り、なぜまたも本格的な大作業になったかを記している文章である。この文章から明らかなのは、「transition」は「景気変動－ミドゥルタウン」を出発点としているということである。同じ問題意識あるいは関心に基づいた一連の研究の間に起こったできごと（ここでは景気変動）を重要な要因として分析に加える場合とこの場合とは根本的に違うと私は思う。リンドの関心そのものが景気変動を中心に形成されていたし、　まさにその関心を追求する目的でなかったら「transition」は生れなかったはずだから。「transition」を「middletown」の後編というよりは、後者の成果もしくは後者のすべてをフルに利用した別の新しい本とみなすことも可能であるという私の考えは、このことに根拠をもっている。また、このようなリンドの関心のもちかたは、結果的に「transition」をしていわゆる「社会学的」、とくに「都市社会学的」研究により近いものに

ならしめたのではなかろうか。コロンビアにおける理論的訓練の成果がなんらかの形で現れたのは中村先生の指摘とおりであると思う。しかし、それだけでは両研究の違い、または両研究の間の変化を十分に説明できないように思われる。

ここの第二の議論をとおして私がいいたいのは結局次のことである。バージェスの書評からみる限り、「middletown」は、それ自身の書評では批判もほとんどされずに高い評価をうけたものの、「社会学」の名著としては認めてもらえなかった。ところが、「transition」の社会学的研究としての評判とともに、「middletown」も見直され、「transition」とともに「ミドゥルタウン研究」として括られ、やがて「都市社会学の古典」となるはめになったのではないだろうか。つまり、「middletown」を中心に「transition」をみるよりは、逆の視点が取られてきたのではないだろうか。そのうちアカデミック社会学は専門化が進み、都市社会学専門研究者あるいは調査方法を勉強しようとする人でなければあの長い、 しかも細かい調査結果のまとめが主要な部分をなしている「ミドゥルタウン」を読む気にはなれなかったのであろう。私自身もそうだった。ここで私はシンポジウムで藤村さんから聞いた感想を思い出す。藤村さんは、たしかに「transition」は分析が入っていて体系的に整理されているけれども、なぜか「middletown」のほうが新鮮で面白い、やはり粗削りでも最初に書いたものがその分こころが入っているのでしょうか、といった主旨の感想を述べた。藤村さんのように洗練されてない「middletown」のほうに面白さを感じるということは、もっぱら都市や地域や調査方法という観点から両研究をみているバージェスにはありえないことではないか。私にはこれが非常に重要なポイントのように思える。

最後に、リンドの価値観にたいする評価を中心に考えてみたいと思う。1930年代の未曾有の恐慌およびその対策としてのニューディル政策は、その当時の知識人の間に論争を巻起こしてばかりでなく、後のマッカシズムの問題にまでつながっていく、アメリカ思想史における最も重要な事件の一つである。バージェスの書評はその片鱗を見せてくれているように思われる。「transition」は問題意識の出発点を景気変動としている。この関心のもちかたからしても、現実問題にかかわるリンドの価値観がその著作に出てきやすいのは当然といえ

ば当然であろう。ところで「middletown」ではリンドの価値観を論じる余地が全くなかっただろうか。私は十分にあったと思う。たとえばアメリカの同質的文化を想定することや、ミドゥルタウンを同質的社会として探求するために調査対象を限定する仕方などに、リンド自身に自覚されない価値観が横たわっているのである。しかしバージェスは、「middletown」の書評では価値観の問題に一言も触れていない。同質性の想定については、「transition」の書評のなかでも、価値観の問題ではなくて単なる方法上の問題として批判しているだけである。ところが「transition」については分量的に全体の30%近くを価値観をめぐる議論に当てているのである。

私は次のように考えてみたい。「middletown」の根底にある価値観はバージェスも共有するものだったかもしれない。だから、それも研究に影響をおよぼした価値観であることが自覚されなかったのであろう。しかもそのような価値観は当時のアメリカにおいて知識人を二分させる論争を巻起こすような論点にはなれない、一般的に共有されるものだったのではないだろうか。しかし、「transition」は、リンド自身が意図するや否や、当時のアメリカにおける最も熱い論争にかかわる価値観を含んでおり、また、評者のバージェスも彼なりの価値観をもっていたのである。或いは、アカデミック社会学の担い手としてのバージェスは、意識の上では、自分の価値観をもってリンドの価値観に対決するというよりは、学問的な研究に価値観を持込んだことにたいして批判的だったのかもしれない。（政治的思想の激流の真っ只中において学問の中立性を守るというのは、これまでアカデミック世界の中心的課題の一つだったのである！）つまり、1930年代アメリカにおける全体的な知識社会の状況のなかでミドゥルタウン研究そのものも（「middletown」と「transition」の間にリンドの関心が移ったという意味で）、また、「middletown」および「transition」を批評する目も、なんらかの規定を受けざるをえなかったと思うのである。そのなかで「transition」は「middletown」より社会学者の関心を引く重要な要素をいろいろと備えることができたのであろう。

4．むすび

以上で、バージェスの二つの書評を比較分析してみた。最初は「ミドゥルタウン」と都市社会学との接点を見つけ出すのが目的だったが、書評を読んでいくうちになんとなく私の頭のなかでは一つのドラマが展開していくのだった。報告の準備をしていたある日、友人との電話で「都市社会学なんて何も知らないのにこんなとんでもない報告を引受けるはめになった」と不安感をもらしたことがある。友人は「そんな遠い昔の本 …… 云々」しながら私の気を落とすことばかりいって電話を切った。ところが、その「遠い昔の本」を読み終え、思いがけなかった書評を読むことになったら、それらは生き生きとした現実感を帯びて私に迫ってきた。もちろん迫ってきたのは「ミドゥルタウン」だけでもバージェスの書評だけでもなければ、その両方でもない。それは「ミドゥルタウン」とバージェスの書評が主役をつとめ、コロンビアとシカゴの両大学、アメリカ社会学界、そこにいる様々な仲間たち、さらに社会学以外のアメリカ知識人たちや政治家なども大勢登場する、一つのドラマの世界である。それはまた、「ミドゥルタウン」が「都市社会学の古典」として認められていく「成功（？）物語」を中心として構成される歴史ドラマになろう。

しかし、本稿はいちおう「学問的」なエッセイである。頭のなかで想像はふくらむばかりだが、本稿ではできる限り想像を排除してきちんと根拠のあるものだけを書こうと努めた。やはり歴史学者がいても歴史小説家や大河ドラマを書いてくれるひとは必要なのだ。バージェスの書評以外に論じてみたい点が二、三あったが、紙面も尽きたし、紙面があっても今はその気になれない。それは別の機会に回そう。「都市社会学」なんてどうでもよさそうな気持？！……明るい。

（はん　よんへ／筑波大学大学院）